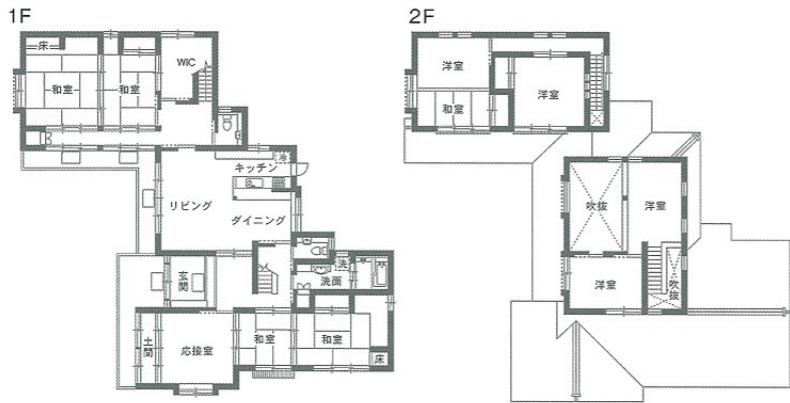




(上) 焼き杉板の門構が、堂々とした佇まいを見せる。(左) 門を入ると、石畳を通り、邸宅に調和するように配置された庭園へと導かれる。庭を囲むように建築されているので、室内のどこからでも樹木をながめることが出来る。(下) 焼き板と漆喰仕上げの外観に合わせて、情緒ある倉敷格子(上下に通る視界子の間に、上端が切りつめてある横くて短い子を3本入れてある)を配置。



(右) 吹き抜けの窓には、作家の豊本義隆さんの手がけた、幾何学模様スタンドグラスが陽光を受けて輝いている。民芸家具の作家さんによる食器棚や家具、漆を塗り重ねたキッチンカウンターなど、どれもご夫婦のセンスが光る洗練されたリビング空間。(左上) 床の間には樹齢200年を超える肥後松の銘木、段違い棚や天袋・地袋など、見事なばかりの和のしつらえ。(左下) 全て引き戸を用いた室内、趣のある老舗旅館のような雰囲気。



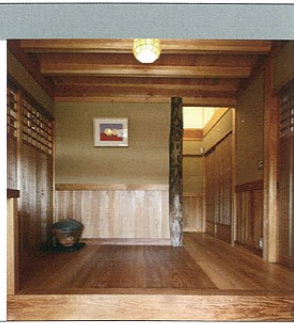
岡山市F様邸

- 上質な大人の家
- 家族構成/ご主人、奥様
- 土地面積/417.00㎡ (126.00坪)
- 延床面積/244.20㎡ (74.00坪)
- 1階/155.70㎡ 2階/88.50㎡
- 建物工法/木造在来軸組工法

HABITER SELECT

『玄關の松の三枚板』

樹齢数百年はあろうかという松の大木。この松を見た時、社長にはFさんの家の玄關を飾る三枚板のイメージが出来上がった。幅は1m近くあり、3枚板の一枚(写真右側)は廊下の奥まで突き抜ける長さだ。これだけの大木にカンナを掛け、5cmの厚みに削ることは、熟練した大工の腕を持ってしても大変な作業であったらしい。



に土を重ね、その上にさらに漆喰を塗り重ねていったもの。「最近の断熱材は、確かに高機能になってきているけど、温気は吸ってくれない。温気を取ってやる」と、格段に爽やかに通気させてくれる。昔の人の知恵はすごいなと社長。工期の短縮やコスト面だけを考慮しては決して出来ない仕事を、手間ひまを惜しまずにやってくれる。そこには、「先代から受け継がれてきた素晴らしい日本の技術を絶対に途絶えさせてはいけない」という大工社長の強い信念がある。成熟した住まいとは、住まい手、造り手が一緒に、長い歳月をかけて造り上げていくもの。日本にも、もっとこういう住まいが増えることを願わずにはられない。

すぐれた芸術作品が色あせないように、確かな素材と技を持って建てられた家は、歳月を増すことで、さらに重厚にその存在感を増していく。7年の歳月を経て、なお一層の風格を漂わせているFさんのお宅。それは、そこに暮らす人の生き方までもが反映されているからに違いない。

芸術を愛するご夫婦が、長い時間をかけて、本当に好きなものだけを集めて出来上がったのが現在の空間だ。それは、幻想的な灯りで魅了する美しいスタンドグラスであったり、腕のいい職人が丹精を込めて作った家具であったりするが、どれもご夫婦が吟味を重ね納得して購入したものばかり。その意識は徹底していて、「この空間に必要なものは何ひとつ見当たらない」。

Fさんのお宅は、2年近い工期を経て完成した。まず、最初に大工社長がお願いしたのは、「この家を建てるための最高の木材を集めさせて欲しい」ということだった。「社長の頭の中には、全ての木材の配置がイメージされていたんでしょね。どれも、この家のために用意されていたかのようにぴったりと取まっています」とFさん。吹き抜けの天井を支える梁は樹齢数百年の松、立ち木そのままの形で加工された松の大木は、社長がこれを迷した。きつと一生お目にかかることはないだろう」というくらい運命の出会いだつたという。ケヤキやクリ、杉、松なども構造材や天井、床などに美しく配置された個性の違いは、一本、一本職人の手作業で墨付けされ、刻まれることにより、その特性を最大限に引き出すことが出来る。それもこれも、木を熟知した大工職人だからこそ可能な仕事といえるのだ。

もともと日本家庭は高温多湿な気候条件を配慮して考えられてきた。「住まいの伏見」の家は、全て小舞(竹を格子状に組んだもの)